
ロストロジック

ふるあたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロストロジック

【Nコード】

N4787K

【作者名】

ふるあたま

【あらすじ】

それはその当時の僕がその当時までに体験したことのある惨状の三乗を三乗したって足元の石ころにさえ及ばないような残酷で悲惨で悲壮で凄惨なお涙頂戴の茶番劇。
だからなんだとしか言えない悲劇の描写。

冗談のような、喜劇的とすら言える程度に惨憺たる結果の物語。
僕はこの物語を一生思い出すことはないだろう。

一生忘れることも無いのだから。

今現在の僕に言わせてもらえば、僕の短い人生で二番目の悲劇。

これは夏休みのあの日。

つまりは量的にも被害的にも歴史に名を残す大雨の日。

あるいは世界一の無様を誇る僕が、ただ不死身になっただけの日。

くだらない追憶の、くだらない描写である。

作者の別の完結済み作品である「ノンロジック」の外伝になります。

くだらない結末。(前書き)

この「ロストロジック」は、先日已完结した拙作「ノンロジック」の外伝となっております。

「ノンロジック」の方のネタバレ描写もあるかもしれないので、先にそちらを読むことを強くお勧めします。

くだらない結末。

雨が降っていた。

その日はどしゃ降りであった。

数メートル先も見えなくなるような、見たこともないどしゃ降りであった。

それに助けられた。

見たくもないものを、ある程度は隠してくれた。

ある程度は、隠してくれた。

それだけだった。

その量的にも被害的にも歴史に残る大雨の日が、僕が人間を辞めた日に重なった。

それだけ、それだけではなかった。

人間を辞めただけではなかった。

動物を辞めただけではなかった。

生物を辞めた。

不死身になった。

それだけだった

何も変化の無い世界の中で、僕はひっそりと、ただ単純に生き物を辞めたのであった。

そして僕は数時間後には下宿に帰り、雨で冷えた体を風呂で暖め、
冷凍してあるおかずと炊いてある米を食べて寝るのだろう。
そしてその数時間後には異質を迎えた初めての朝を何の変哲も無く
こなすに違いない。

僕が生き物を辞めたからと言って、世界が終わるわけでもなく、ま
してや何かが変わるわけでもない。

そんなものだ。

くだらない結末。(後書き)

時系列的にはノンロジックの前の話となっております。

一話。最低最悪の選択肢。

八月の二週目。日曜日。

つまりは全国的に夏休みのご真ん中といったところか。

沖縄は夏休みが長いとか、北海道は短いとか聞いたことあるけれど、そんなことはどうでも良い。

僕は読書感想文を、立ち読みしたエリック・クラプトンの自伝で書き、政経の宿題である似非新聞を、去年の模写をして仕上げ、美術の宿題だけは夏休み初期から真面目に取り組んで、今しがた完成させたところである。風景画。提出されれば、きつと上手いと言われる。そして上手いといしか言われなただのつまらない絵を描き上げた。

そんな自分の芸術の無能性を一頻り嘆いたところで何かが変わるわけでもなく、ただただ無為に時間は進み、既に午後八時を回っていた。

日曜日の午後八時。

この時間にはいるだろう。

夏休みと言っても、部活はある。

女子バスケットボール部に所属する超期待の新人は部活も真面目に出ているはずだ。

今のところ、うちの学校に存在する室内競技の部活動で、一番に成績が良いのは、僕が三ヶ月前まで所属していた男子バスケットボール、次いで女子バスケットボールであり、うちの学校のルールとして、男女別で部活が存在する競技は、男女一緒に練習することになっているので、体育館の使用時間の決定権は、バスケットボール部にある。

午後に部活があると、朝が遅い怠惰な人間にとっては一日が潰れることを意味するので、やっぱり午前中の時間帯が人気がある。

それはやっぱりバスケットボール部にも当てはまるので、バスケット

トボール部が練習するのはいつも午前中だということになる。
なので、バスケットボール部に所属する彼女、あるいは完全無欠の
僕の幼なじみ、詰まるところ霧島唯は、早く休みをとるべく、日曜
日の午後八時には家にいるだろう、というのがロジック詰めの際の
推理である。

そう。残りの宿題を借りに行くのだ。

メールをすれば良いのだろうけれど、それはそれで気恥ずかしい。

適当に白いジャージを着て、便所サンダルで外に出る。

気付いた。

とてつもなく曇っている。曇っているという曖昧な言葉で表現して
良いのかとさえ思われるレベルで、曇っている。

まあ良い。霧島唯の家まで、歩いて十分前後だ。

雨が降ったら降ったで、おいしい展開になるかもしれない、と下劣
な僕はくだらない妄想を膨らませながら、誰もいない家に、行って
きますと挨拶をして、霧島唯宅に向かう。

中間地点で降り始めた。

ザアザアと、いきなり降り始めた。

ポツポツという期間がなく、いきなり圧倒的などしや降りである。

なんというか、僕は意地になつていた。

さっきのくだらない妄想のせいかもしれない。

びしょ濡れで霧島唯の家、あのアパートの二階の部屋のインターホ
ンを押すと、彼女がビツクリして、部屋に上がつてと言う。そして、
なんでこんなに雨降ってるのに来てるの、と聞かれて、僕は答える。
宿題を、借りに来たんだ。すると霧島唯は慈悲深い笑みを浮かべ、
今日は泊まっていきなさいと言う。そんな妄想である。

極めつけの馬鹿だった。

こんな雨の中、宿題を借りに行くなんて、馬鹿以外の何でもない。
むしろ馬と鹿に失礼だと言えるレベルである。

とにかくこれが不運だった。
いや、不運の始まりだった。

霧島唯の家の手前。

視界が狭まるほどに強くなった雨に打たれながら、僕は気付いた。
黒いジーンズ、黒い革ジャン、黒い髪をオールバックにして、どし
や降りの中を徘徊している、生物。

生物。

すぐに分かった。
人間ではないと。

歩きながら、手当たり次第に破壊しているのだ。
壁を抉り、電柱を殴り、マンホールを踏みつける。
粉々のバラバラに砕いている。
不幸中の幸いか。
雨のせいで、向こうは僕に気付いていない。

人間の形をしている、明らかな人外。人害。

「……いやいや……」
いつの間にか僕の足は止まっていて、冷や汗が雨に流されて、肝の
内側から冷えきっていた。

いや。ありえないだろ……。

何してんだあの兄ちゃん。

「ん、よあ、そこのガキンチヨ」
気付かれた。

水溜まりの水を踏んで弾かせながら、オールバックは僕に近づいてくる。

「おいおい、くひゃっひゃ。そんなびびんなよガキンチヨ。てめえを取って喰ったりするわけじゃねえんだから」
わらう。その生物は、わらって近づく。

やばいだろ。

なんだこれやばいだろ。

コンクリぶつ壊した上にマンホールまで木端微塵だぞ。

やばいやばいやばいって。

怖い。恐い。

戦慄。恐怖。恐慌。脅え。怯え。

そのとき、ポンと後ろから肩に手を置かれた。

大雨の中、茶色の短髪がよく似合う、スーツを着たスレンダーな女性が、右手で大きい傘を持ち、左手を僕の右肩に置いて、立っていた。

彼女の左側にはパーカーのフードを深く被り、その上から黒のカツパに身を包んでいる人間が一人。

偶然にも通りかかった通行人。

「すまないね少年。このことは綺麗さっぱり忘れると良い」そう言
つて、彼女は傘を持ったまま僕の前に出た。

「あ？なんだお前」と質問したオールバックに答える女性。

「雨で聞こえないよ」

そう言いながら、女性が傘を畳もうとした瞬間に、バシヤリと水が跳ねる音と共に、オールバックが走り込む。

目にも止まらぬ右鉄拳を、女性は半身をずらして避ける。

生物は空振りした勢いに乗って、前方向に宙返りすると同時に踵落として兜割り。

女性は傘の両端をそれぞれもって頭上にかざし、踵を受け止める。

踵落としての威力はどれ程なのかわからなかったが、傘が異常な硬度を持っているのは確かだった。

傘は折れずにしなり、踵を跳ね返す。

生物は体勢を崩して背中から落ちる。

オールバックの右腕から、何かが発射された。

雨で見えない。見たくもない。

あんな、あんな化け物染みた右腕なんて、見たくもない。

発射された何かを、女性は軌道の横から弾いて落とす。

女性が右手を後ろに、つまり僕とフードの二人に向けて、声を張り上げた。

「こいつは強い！援護を呼ぶから、その少年を安全なところへ！」

フードを被った人間は、女性的な声で応じた。

「そうですね。行きましょう。少し離れれば」

フードの下から僕の瞳を覗いた瞬間、彼女は、目を見開いた。雨が降っている上に、フードを被っていて、顔なんざまともに見えないが、それでも分かった。

彼女は、驚愕した。

「あ、朱音さん！この子……」

生物と睨み合っている女性に報告した、フード女。

「潜在者です！」

「覚醒させないように注意するんだ！」

再度右手をこちらに向けた、スーツの女性。

「しかも朱音さん！この子の能力 『不死』なんです！」

スーツ姿の女性がわらっていたことに、僕はそのとき気がつかなかった。

状況が飲み込めない。

生物が動いた。

化け物染みた右腕を、右肩が破れた革ジャンから晒して、女性に襲いかかる。

雨すら弾ける拳圧。

爆発音を立てながら放たれた拳は、虚しく中空をきった。

女性は、跳んでいた。むしろ、飛んでいた。

僕の価値観が総崩れする。

女性は、その生物の頭上まで、軽く跳んでいたのだ。

垂直跳びで二メートル弱。

そんなことが、可能なのか？

間違いなく、不可能である。

そして女性は、さっきのお返しだと言わんばかりに、踵を落とす。

綺麗に頭の頂点にヒットして、一瞬のスタン。

そして生物は、否、化け物は、怒り狂った。

雄叫びを上げる。音圧で、その場所だけ一瞬雨が止んだ。

僕は腰を抜かすことすらできずに、ただただ呆然と直立不動。

目の前で、化け物は、化け物染みた右腕と、そして化け物染みた左腕で、電柱をへし折った。

「空間隔離は大丈夫かな」とスーツの女性が淡々と問う。

「推測の域ですが、きつと大丈夫です。空間の隅に移動しておきま
す」とフードの女性が応えた。

暴れた。

化け物は、折った電柱を振り回して、暴れた。

大破する。

全てが大破する。

壁も地面も、家も木も。

全てに傷がつき、崩壊する。

「……………ん……………な……………嘘だろおい……………」

後退ることすら許されずに、目から入ってくる残酷な程に正しい情報
報を、脳で否定し続ける。

やばい。

霧島唯の家が、近くにある。

尊敬する幼なじみの家が、近くにあるんだ。

壊れる。

死ぬ。

「ありえないだろ……………」

そんな状況を否定するための方策が、思いつかない。

目の前で振り回される電柱と、超越した身体能力でそれをかわし続ける女性。

尚も、壊される。

横薙ぎに振られた電柱を、反対回りに回し蹴りを当て、電柱を折った女性。

そして化け物を凌駕するスピードで、オールバックの顔面に炸裂した、女性の拳。

「なっ……」

電柱を折った女が問いかける。

僕に問いかける。

「少年！世界を救う仕事に、興味はないかい」

世界を救う仕事。

仕事だと？

今のこれが、彼女の仕事だと？

「少年。君が協力してくれるのなら、被害はこれで収まる。ああ、もちろん君が協力しなくても、被害はもうちょっと増えるけど、きつと大丈夫だ」

被害が増える。

壁を抉られた家。

風穴が開いた家。

「安心してくれよ少年。無機物なら直せる。死人が出ない限り、被害は零だと言っている」

死人。

僕は、雨で見えないが、そう遠くはない、むしろ近いと言える距離にある霧島唯の家の方向を見遣る。

「そして少年。この仕事をやると、君は人間を辞める。いや違うな。君の場合は、生物を辞める」

不死身になるんだよ。

彼女はそう言った。

「……オレにしか、できないのか？」

「そんなことは無いよ。条件が揃えば、誰だってできる。誰もやらないんだけどね」

誰もやらない。

「あんたは何なんだよ」

「私も嫌々やってるんだよ」

化け物が立ち上がった。

スーツ姿の女性に、さっき僕が化け物に抱いた感情と、全く同じものを感じているのが、露骨に分かる。

「ああそつだ少年。ちなみに不死身の力は君だけだ。君がやってくれるなら、随分と楽になる。君にしかできないことも沢山あるからね。けれど君には選択する権利も義務もある。嫌だと言っても誰も責めたりしないよ」

「……やりますよ」僕は言った。言ってしまった。

「誰もやらないんなら、僕がやる。僕しかできないんなら、僕がや

る」

化け物が歩く。

「良いのかい？これは君が、一生、死なないということだよ？」

「ええ。構いませんよ」

僕は見据える。

歩いてくる化け物の背後にある、霧島唯の家を見据える。

今、何もしなくても、霧島唯に被害は及ばないかもしれない。

けれど今、何もしなかったら、霧島唯に被害が及ぶかもしれない。

何もやらないで見殺しにするのなんて、御免だろ。

「こここの近くには尊敬するやつがいますので。彼女を守れるなら、他のことなんて知ったこっちゃないけれど」

喋り始めて、解れた体を実感しながら、続ける。

「それで世界を守るんなら、僕は幼なじみを助けるついでに、その仕事を引き受けます」

キザなヒーローのセリフ。

残念ながら僕の場合は、これが方便ではなく、本気の本気なただけ
れど。

「さあ。不死身とやらに」

横のフード女が僕の正面に立った。

「……良いんですね？」

「お願いします」

フード女の右腕が。

僕の。

頭に。

触れた。

「終わりました」

「……え？」

「あなたはたつた今、不死身になりました」

化け物が走った。

上條朱音を飛び越えて、僕とフード女に向かい、走ってくる。

化け物のような右拳が、フード女を襲う。

不死身。

僕は、不死身。

ぐい、と左手で黒のカツパを引いて、女性を後ろに、そして僕が前
に出る。

僕は右手を翳す。

襲いくる拳を受け止めようと、僕は右手を翳す。

接触。

バキバキと、パキパキと、ベキベキと、ペキペキと、グシャグシャ
と音を発して、僕の右手は、ぐちゃぐちゃになった。

無論、拳が止まったわけがない。しかし軌道が反れて、僕の頭に当
たると思った拳は、僕の左の鎖骨にぶつかった。

爆散。

左鎖骨の着弾点を中心に円を描くように、肉も骨も消え去った。

そして、再生した。

僕は、生きていた。

実際、この程度の風穴で人間が死ぬのかは分からないが、血まみれの僕は、血にまみれた僕は、どこからどう見たって無傷だった。

化け物は、ビクリ、と体を反応させた後、硬直して、動かなくなつて、死んだ。

化け物のすぐ後ろに、スーツ姿の女性は立っていた。

「ようこそ」

動かなくなった化け物を横に倒し、女性はわらって言った。

「非論理の世界へ」

雨は一層、強くなっていた。

二話。タナカロジック。

ニュース。ニュースだ。

昨日の大雨はやっぱり凄かったらしい。土砂崩れやら洪水やら氾濫やらで、地域によっては前代未聞の被害をもたらしたと言っている。次のニュースに切り替わった。

都心の動物園のパンダが死んだそうだ。泣いている子ども、飼育員。ニュースは、それで終わった。

電柱を折る化け物のことも、電柱を折る女性のこと、全くもって報道されていない。

もちろん、僕もだった。

僕が不死身になったことなんて、世の中が震える材料なんかにはならないらしい。パンダが死んだことのほうが、よっぽどセンシティブなのだ。

圧倒的にどうでもいいことなのだ。

人が一人死んでも、人が一人生き返っても、それはパンダの生死を越えることはできない。

もちろんそれは埋没した民衆の中だけに当てはまることなのだけだ。

「かけがえのない命」と叫びながらも差別するマスコミ。某国の大統領が死ぬと、ニュースになる。世界中に、盛大に伝えられる。

けれど僕の隣に住んでいる人が死んでも、地域の新聞に葬式の案内

として、小さく載るだけだ。
だから当然である。

世の中には自分の代わりなんざ沢山以上にいることも、自分の存在がいかに矮小なのかも、相対的に世界がいかに巨大なのかも、僕はある程度は知っている。

世の中にとつて、僕らの命の重さなんざ、これっぽっちもそれっぽっちもこれっきりもそれっきりも、全くもって存在しない。

小さいのではなく、軽いでもなく、零なのだ。
質量零。

水素原子よりも軽い。

そんなくだらないことを再確認するほどに、今朝は衝撃的だった。衝撃的で圧倒的に、悲劇的で絶望的に、何も変わらなかった。

何もかもが、変わらなかった。

眠くはなかったが、眠ろうと思えば眠れて、お腹は空いていなかったが食べようと思えば食べれて、排泄もした。

変わらなかったのは世界だけではなかった。

僕の腐った価値観も。僕の腐ったロジックも。僕の腐った心根も。全くもって変化無し。

最高にくだらないニュースを消して、台所に行き、皿を洗う。

一通り家事を終えると、既に午前十一時。

約束の正午まであと一時間。

待ち合わせには早めに着いておくのが良いだろうと思い、ジーパンを履いて、白ベースのタンクトップに黒いパーカーを適当に選んで着る。

自転車には乗らずに、歩く。約束の Pasta 屋には、徒歩で三十分と言ったところか。良い具合だろう。

三十分歩くと、赤い壁が目に見えそうな、いかにも小洒落た感じのパスタ屋に着く。

「……お、少年。早いね。感心感心」

と、駐車場を歩いていると、昨日の女性が、黒い普通の乗用車で、僕の横を通った。

彼女もちょうど今、到着したらしい。空いていた駐車スペースに、車を綺麗に収めて出てきた。

茶色の短髪。整った顔立ち。スレンダーな体型で、やっぱりスーツを着こなしている。

「……こんにちは」

待ち合わせの相手は、彼女である。

昨日、あの化け物を倒した後、待ち合わせの時間と場所を設定した。

「じゃあ少年。とりあえず入ろうか」

ドアについている鈴の音を鳴らしながら、パスタ屋の中へ入る。

壁際の席に座り、わけのわからないメニューを開いて、わけのわからないようにしていると、「適当に注文していいかい？」と聞かれたので、黙って頷く。カルボナーラ二つがオーダーされた。

「さてはて少年。早速本題だ。君は我が社に入社してもらう。安心して。履歴書も身分証も、親の印鑑もいらないよ」

「場を汚すような発言を許してください。僕の親は死にました。両方」

女性は驚いた。

「まずかったかな？」

「いえ。全く問題ありません」

そうかい、と言って頷く女性。水を少し飲み、続ける。

「仕事の内容は、前に言った通り。世界を救う。それだけ。で、シフトの話だ。暇なときと、忙しいとき、決まってる？」

「今は夏休みですので、いつでも」

「そうかい。良いねえ夏休み。じゃ、学校が始まったら平日はなるべく君は使わないようにするから。安心すると良い。後から仕事場に案内するよ」

ふ、と一息置いて、女性は手を組み、机に置く。妖艶な笑みを浮かべる。

「心理テストをしようか。少年。なあに、身構えないで良い。お互い、名前も知らない仲じゃないか。自己紹介がてら、中身を晒してくれるだけで良いんだ」

じゃあいくよ、と言って、机に置かれている肘に体重をかける形で乗り出す女性。

「君の友達と、昨日君が言った『尊敬するやつ』が人質に取られていたとする。どっちか一人を助けることができる。どっちかな」
「後者です」

「じゃあ前者が十人になるとどうかな」

「後者です」

「百人」

「後者です」

「千」

「後者です」

「万でも後者なんだろうね。じゃあ前者が『私』の場合は？」
「後者です」

ふむ、と言って納得するようになった彼女。続ける。

「じゃあ違う質問だ。もしも好きな時代に戻れるとしたなら、いつに戻る？」

「精原細胞ですね。精子の前」

「どうしてだい？」

「僕が産まれないようにする」

愉快そうに、右手を握って口に当て、クスクスと笑う女性。

「ふふ。君は面白いやつだ。生まれ変わったら何になりたい？」

「僕以外の生物なら、なんでも」

女性が一頻り笑ったあと、タイミングを図ったようにカルボナーラが来た。

僕はそれをフォークでくるくる回してまとめ、スプーンで押さえながら口に運ぶ。

「少年。最近話題の『バイオテクノロジー』についてどう思う？倫理的な観点が叫ばれてるじゃないか。是非とも君の意見が聞きたい」

「……バイオテクノロジー、ですか」
遺伝子进行操作する技術。『倫理的観点』と言っていたから、この場合は『クローン』のことで良いんだろう。

「僕は、全く構わないと思いますよ。ミサイルやら核兵器やら、殺戮の技術は駆使されるのに、誕生の技術が禁忌だというのは、明らかにおかしい」

「禁忌。うん。『神の領域』だとか言われてるね」

「そもそもそこがおいしいと思うんです。命を作ることは『神の領域だ』だとか。かなりどうでも良い。そもそも神様だって人間の産物だってのに」

僕はパスタをフォークに巻く。

「どうせどこかでパラダイムシフトが起きます。個人的には第三次世界大戦当たりかと思ってますけど」

「無神論者かい？」

「非神論者ですよ」

乱暴にパスタを突っ込み、飲み込む。

「僕は目に見えたものは信じます。目に見えないものは、否定します。ブラジルやらチリやら、外国なんて国、地球の裏側なんて、本当にあるのかさえ疑いたい。地図でもテレビでも見るので、否定はしませんけど」

「蛙だね」

「井戸の中でしか生活しませんので、それで十分なんですよ。大海なんて知らなくても、僕の世界はそこにはないんだから、知ろうとも思わない。馬鹿にされる筋合いもない。そもそも相手がいらないだから」

パスタを上品に食べながら僕の主張に耳を傾ける女性。

「隔離された井戸の中の王様は、井戸の中だけを知れば良い。隔離されてるんだから、周りなんて関係ないんです」

「そうやって、自分を閉じ込めたわけかい」

「肯定します」

手を休め、僕を見る女性。

「……二ヒリストだね。自分の世界以外は何も無い。良い思想だと思っよ。少なくとも、私は。それに君を隔離しているその仮面は、とっても柔軟で、頑丈そうだ。私はこれでも、人の内面を見るのは得意な方だと思っただけだね。いや、確かに君の内面も見える。内面は見えるけど、底は見えない。その表現が一番だ」

「僕だって、洞察力はあるつもりです」

「私の中身も見えるかい？」

「隠すつもり無いでしょう。丸見えですよ」

僕は、嘘を吐いた。彼女の中身は、全く見えない。全てがダミー。底が見えないのではなく、中身が見えない。壁の向こうを見るのは、とても簡単だったが、壁の向こうに壁があり、そのまた向こうにも壁がある。延々と続く仮面の核の、皮すら見えない。

カルボナーラを粗方片付けると、女性はやっと名乗った。

「上條朱音だ。よろしく少年」

「田中圭太です。こちらこそよろしくお願いします」

握手を交わす。

「じゃあ、仕事場に行ってみようか」

三話。初体験。

「あ！？なんだてめえは！新入り！？こんなガキが！？こんなガキが新入り！？ふざけんなよクソミソクソツタレ！神様が許しても俺様が認めんぞ！」

それが僕と、広島宏の初めての出会いだった。インパクトは大きかったというより大き過ぎた。

口調じゃない。いや、正確には口調と見た目の不一致であるから口調も入っているかもしれない。

ギャング映画顔負けの独特過ぎて新言語に聞こえてきそうなの言葉と、声の主はなんと、小さな小さな女の子、ではなかった。ありがち過ぎるパターンがこの白い部屋に存在するわけがなかった。

小さな少年だった、わけでもない。

おじいちゃんだった、というのが正解であった。

モザイク無しでは教育テレビに出れないような剣幕で怒鳴り散らして、威張り散らして、唾を散らして、やっぱり怒鳴り散らしている御老人がそこにいた。

世界観が変わった。

おじいちゃんを知らない僕が抱いているおじいちゃん幻想が光速を越える速度で遠退いていき、ミサイルで撃ち落とされて、揺り鉢で擦り砕かれて溶鉱炉に入れられて二酸化炭素になって見えなくなつた。

脳ミソが直立不動開眼開口無言絶句以外のことを許さなかった。

夢にでてきそつだ。

獣のように唸る老人を、上條朱音は右手で指し、紹介した。

「広島宏さんだ」

広島宏と紹介された老人は、ふんぞり返って、それはもうふんぞり返って、僕を見下した。

「田中圭太です」

「黙れ豆太郎」

「……」

どうやら耳が遠いらしい。

「じゃあ少年。早速仕事をやってみようか。私も一緒だから安心するんだ。習うより慣れると言つつもりではないけどね、この場合は習う術が無いから慣れるしかない感じなんだよ。君の能力を最大効率で引き出すために必要なものを見極めるとしよう」

女性は、玄関から正面にある、一際大きな部屋を指差し、言う。

「あそこから出発するよ。着替える場所もあるから、行こう」

*

時系列、パスタ屋を出て、広島宏と出会う前。

白い部屋。何もかもが白い部屋。踏み込むことすら憚れるような、純白の空間。

そこそこに入り組んでいる道を通り、着いた。到着すると、上條朱音に「ここで待ってて」と言われ、一人ポツンと玄関で立っていた。いつもとは違う店に來ている感覚。不馴れな調度に、新鮮な面子。

そこでびくびくおどおどしていれば、まだかわい気があったかもしれないけれど、残念ながら僕はそんなことはなかった。ポケットの

音楽プレイヤーを取り出して、自分の世界に潜る。壁にもたれて腕を組み、下を向いてジツとしておく。

間もなく肩を叩かれ、正面を向くと、上條朱音と老人が立っていた。上條朱音は、両手で抱えている、黒いジャージを僕に渡す。

「仕事のときはそれを着ると良い。サイズが合っていると良いんだけど」

僕はそのジャージを受け取り、隣の老人を見遣る。

「ああ、宏さん。この子が昨日言ってた新人です」

*

そして現在に至る。

さつき指された部屋へと、上條朱音と向かう。

「それにしても、肝が座ってるんだね、少年。こんなわけの分からない場所に来て、あんなに落ち着いてるなんて」

「ええ。こういう感覚は、好きではないですけど、嫌いでもないんです。誰も僕のことを知らない。良いじゃないですか。素晴らしい。遠くに行くのは、好きなんです」

僕は歩調を変えずに、淡々と語った。

「今の高校も、校区外受験の枠で入りました。全体の5%だったかな？無論、遠くに行くために」

僕のことを知ってる人間が、いないところに。まあ、幼なじみが一人だけ同じ高校に来てしまったんだけど。

「いじめられてたのかい？」

「さあ。否定しませんよ。肯定もしませんが」無機質なりズムで足音を響かせる。「リセットしたいんだと思います。仲良くなつて積み重ねたものを、崩して去りたいんです。僕は」

「踏み込みたくない、かい？」

「踏み込まれたくない、とも続きます」
目的地に着いた。

数人を通りすぎ、ロッカールームに入り、着替える。
出てくると、上條朱音はスーツのままだった。

「さあ少年。部屋の中心へ」

言われた通りにすると、その部屋にいたオバサンが近づき、前に立った。彼女が右手を軽く動かすと、僕の目の前に、亀裂が入る。

何も無い場所に、亀裂が入る。

「え」

何か割れるような音がして、亀裂が広がり、真っ黒な空間が覗く。

「そこに入るんだ少年」

「ここに、ですか？」

「じゃあ私が入ろう」

言うと、女性は何の躊躇いもなく、そこに飛び込んだ。僕も恐る恐る入る。

高原。

背の低い雑草が延々と続く高原に出た。

「……ん、な……」

「驚いたかい少年。ここは異世界だ。あの裂け目から侵入する。そしてここに居るのが」
「ビッ、と右の人差し指で前方を指す上條

朱音。「化け物だ」

化け物。単純なフォルムをしていた。黄色い丸いゼリー。それだけで説明がつく。

もう少し詳しく言うと、透けて見える黄色い丸状のゼリーの中心に、真っ赤な梅干しの種のようなものがある。

俗に言うと、あれが『核』か。

案の定、上條朱音が言った。「あの真ん中のやつを叩けば良さそうだね」

ポン、と僕の頭に左手を置く彼女。「今から君はスーパーマンだ」瞬間、体が軽くなった。

「う、わ……」

「ふむ。体にとってマイナスの状況は忽ち回復されるけど、プラスの場合は回復しないらしいね。この場合に回復と言うのは変かもしれないけど」

僕は化け物を見据える。

見据えた瞬間、何かが心臓を貫いた。

「……へ？」

黄色い槍が飛んできて、僕は心臓を殺られて、死んだ。生き返った。

「すごいね少年。まるで海面に刀を走らせた感じだ」片っ端から塞がった。

「……はは」

なんだよこればかじゃねえのしんぞうさされたんだぞなんでしなないんだよなんでいきてんだよなんでいきしてんだよなんでわらってんだよ。

「……冗談じゃない」

「冗談じゃないよ」

視界がずれたと思ったら、僕は膝から崩れていた。失禁していた。無様に。漏らしていた。

目の前で、スーツの女性が、鬼神の如く立ち回り、ゼリーを剥がして、核に触れる。

化け物は、固まって死んだ。

「立てるかい少年」

「……」

沈黙が精一杯。

雨の日にだって、体に風穴が空いたのに。なんで今日はこんなに無様を晒す。

決まっている。

化け物だからだ。化け物染みた腕のパンチじゃない。化け物の槍が、心臓を的確に貫いた。

フォームが違う。

感動も、恐怖すらも何もない化け物のフォーム。人間とは、違い過ぎる形。

そして何より、爆散だとかいう、現実離れた死因ではなく、刺殺という明確なジャンルだったことも大きいかもしれない。

僕は今、確かに死んだ。

そして、死ななかった。

なんてことだよ。

「……僕……、不死身なんですネ……」

震える声で、虚ろな目で、力の無い全身で、言葉を吐き出した。

「不死身……なんですね」

「そうだよ。君は、死んでも死なない」

僕は今日、初めて死んだ。

四話。恐慌。

「う、うう、うううう、うううう……」

ガチガチと鳴る歯、カタカタと踊る足、ブルブルと震える全身。自分の家のソファで、頭を抱えて丸くなり、僕は、何かに怯えていた。

止まらない動悸。止まらない汗。止まらない思考。

何も考えていないくせに。

何も考えられないくせに。

思考が止まらない。

あの空間から出たあと、太ったおばさんが何か、カウンセリングのようなものを行った。内容なんざ覚えていない。そのあと、いつの間にか上條朱音の車に乗せられていて、いつの間にかソファでこうなっていた。

昨晚から。昨晚から、ずっと。

「きの、う、から……」

絶望がのしかかる。

昨晚から何も食べてないどころか、何も飲んでいない。

「う、うう」

化け物化け物化け物化け物化け物化けもの化けものばけものばけもの。

がりがりぼりぼりと頭を掻き回す。閉じない瞼に苛立ちながら、止まらない息切れを嫌悪しながら。

「う、ああああ！」

爆発音が鳴ったと思ったら、机を震えた携帯が叩く音だった。

動揺している。あらん限りに揺れている。

上條朱音。

サブディスプレイに浮かんだ名前。

震えが止まらない手で携帯を持ち、震えが止まらない指で通話ボタンを押す。

「こんばんは、少年。調子はどうだい？」

「上々ですよ」

こんな状況でも、僕の仮面は形だけでも残っている。弱いところなんて見せるわけにはいかない。

こうやって他人を騙すことで、自分も騙されたらしい。たった一言で体は元に戻った。

しかし今、彼女が『こんばんは』と言った。何時だ。

「さすがは少年。もう仮面は被れるのかい。良いよ。無理しててもだからとりあえずカウンセリングを受けてくれないか」

「『無理しないで良いよ』って言うのが優しさだと思えますけど」

「無理してる人にとっては『無理するな』っていうことが無理なんだから知らないのかい。ま、良いや。迎えに行くから支度しておいて」

「え、もう夜ですよね？」

『こんばんは』って言ったよな。

「夜からやるんですか」

「カーテンを開けてみるといい」

プチ、と電話が切れた。

カーテンを開けると、お日様サンサンである。

……野郎。カマカケだったか。

*

「昨日、相当に動揺してたから、もう一回自己紹介するといいい」

僕はどこかのウザい馬鹿野郎に何と言われようと、月曜日が週の初めだと確固たる意思をもって確信しているけれど、ここは正しく言っておこう。

霧島唯に宿題を借りに行くのが未遂に終わった日曜日から見て明後日の、八月の二週目、火曜日。午後三時。白い部屋。玄関付近の向かい合って並んでいる白いソファ。僕の隣に上條朱音、そして向かいに

「上田細美です」

が座っている。

「大丈夫？圭太ちゃん」

糞馴れ馴れしいおばさんだ、なんてことは思わない。

「お陰様で。っていうか、まあ、昨日のことなんてあんまり覚えてないんですけど」

嘘を吐き通すことは出来ないと思ったので、本当のことを言う。

「えっと、その、カウンセリング、でしたっけ？別に要りません。

あ、えと、言い方悪かったですね。もう大丈夫ですから」

「少年はあ」と横でポテトチップスを食いまくっているスーツの女性が言葉を発した。「さつき私と電話したときに、立ち直ったんじゃないかな？」

この女……。

「そうだとしたら？」

「自己暗示の類いじゃないか。付け焼き刃も良いところだね。よし、今から仕事に行こうか。君に拳銃を与えるから」上條朱音は立

ち上がって、わらいながら僕を見下して言った。「君も化け物殺し
てみよう」

*

用意されていたジャージに着替え、昨日と同じ部屋に入る。

目の前に亀裂が入る。

昨日と同じように、裂け目が広がり、黒い空間が覗く。

動悸。

フラッシュバック。

昨日の。昨日の。

昨日の情景。

死んだ僕。

死んだ心臓。

殺された僕殺された心臓。

生き返った僕。

「……は、あ……」

動け。

動かない。動けない。動きたくない。

行きたくない。

死にたくなくはない。死にたいわけじゃない。

生き返りたくない。

「どうした少年。頭の中を虎と馬が走り回ってるのかい？早く踏み出せよ。銃はそこで渡すから」

僕は踏み出した。

のに、足は動いていない。何も動いていない。

「戦闘に使われる能力者はね、ほとんどそうなるんだよ。自分の世界にいる生物を、遙かに超越した化け物を見たらね。それこそ勇者様やら、何かの主人公でもない限り、小便は漏らすし、気絶もするし、怯えもするし、トラウマにもなる。それが普通なんだよ。君は知ってるじゃないか。自分が特別ななんかじゃないってこと。ただ埋没した群衆の中の、何の価値もないたった一人でしかないことを、君は幸運にも理解してるじゃないか。……無理すれば良いよ。好きだけすれば良い。それで疲れたら、少しだけ休もう」

長い台詞の間、僕の足は、全く動かなかった。

*

カウンセリング。

実際のカウンセリングがどうなのかは知らないけれど、さっきのおばさん、つまり上田細美さんとのカウンセリングは、ただ徒然と世間話をするだけだった。

僕の趣味は、これと言っては浮かばないけれど、強いて言うなら音楽か。高校生でジャズを聴く人はそう多くはないだろうから、これは僕の趣味だと言えるはず。

そして上田細美さんのする話とえば、専らテレビ番組のことだっ

た。僕は絶望的にテレビを観ない。たまに格好つけて古い映画を借りて観るか、ご飯を食べながらニュースを観るかのどちらかでしかテレビを使わないのである。

だから勝手にペチャクチャ喋りまくる上田細美の話を、僕が一方的に聞く感じだった。

それでも。

それでも落ち着いた。

自分でもビックリするぐらいに、穏やかな気分になっている。

「あら、もう七時。そろそろ帰った方が良さかね、圭太ちゃん」

「あ、そうですね」

随分と楽になった。

お礼を言っただけ上がる。

「圭太ちゃん。何かあったら遠慮なく言ってね」

「ありがとうございます。頼りにしてます」

そう言っただけは歩きだし、白い部屋を出る。

家まで約三キロメートル。地味に遠い。

しかし、上田細美さん。とっても良い人だ。何故か心の底から癒された。

明日も仕事があるのだろうか。

大丈夫そうかは分からないけれど、とりあえず行ってみよう。慣れなきゃいけない。

そうだな。仕事の前に、ジんクスというか、何か決ったことをすると良いかもしれない。

深呼吸やら、何でも良い。

覚悟を決める、とかどうだろう。

集中する意味を込めて、気を引き締める意味を込めて。

しかし、何の覚悟？

決死の覚悟なんぞ、僕には縁が無いし。

……生き返る覚悟、とか。

まあ全然まったく意味がわからないけれど、これこそが僕に必要な気がする。

うん。生き返る覚悟。

無様な僕に、相応しいじゃないか。

五話。エゴと我儘。

立方体、直方体、それらの形の何かが、雑然と転がっている空間。色も大きさも多種多様だけれど、立方体と直方体しかない。直方体に見えるものが、実は立方体かもしれないし、その逆かもしれないけれど、あまりにどうでもいいだろう。そしてそれらの間から覗くように、こちらを伺う化け物。

*

水曜日は上田細美さんとカウンセリングした以外には何もなく、一日が終わった。

ということでは今日は木曜日。

僕は電話で『仕事だよ』と呼ばれ、どうせ仕事なら、ウォームアップがてら家から白い部屋まで走った。

息切れしなかったことに着いてから気付くが、汗はかいていた。少しかだけ。こういう場合、漫画なんかでは「あ、汗一つかいてないだ」と……!？」となるのだろうかけれど、汗一つかかない人間など、最強どうのこうのの前に、新陳代謝が異常な只の病人であるとか、そんな反骨精神をこんな矮小な存在である僕が露にしたって、少年漫画界のお約束は揺るぎそうにもないから口には出さなかった。

そこで僕は、鈴木とか言うオジサンを紹介され、上條朱音、鈴木さん、そして僕の三人で異空間に飛んだわけである。

一昨日の自己反省会で決めたように、覚悟を決めると、案外すんなりトラウマを乗り越えた。

いや、カウンセリングの効果だろうけれど。

*

そういうわけで現在に至るのである。

「で、少年。こちらに渡る方はクリアできたようだけど、化け物に殺される方はどうだい？」

僕の右側にいる上條朱音が聞いた。

「大丈夫だと、思います」

「強いねえ圭太君」

左側にいる鈴木さんが優しく言った。上田さんと並ぶ常識人かもしれない。

「じゃあ鈴木さん、お願いします。少年、化け物の方から仕掛けてこないようだから、こっちから行ってみようか」

化け物の距離は百メートル前後。影にいるので、光る眼しか見えな

い。僕は右の上條朱音と歩調を合わせるように前に進んだ。

目の前に化け物がいた。

「……は？」

背中が泡立つ。

大きさは三メートル程度。

半獣という表現で正しいのだろうか。

僕から見て右半分は毛むくじやら、左半分は人間。新手の半獣だった。

右足はチーターを思わせる大腿筋の下に伸びる細い足。足の先は無論、人間の形ではなく、肉球がついてるタイプの足。そして右半身のヘソより下は金地に黒の斑模様。やっぱりチーターだろう。

そしてヘソより上は真っ黒の毛に覆われ、右腕は無く、翼が生えて

いて、その先に鉤爪がある。
顔は犬やらのそれだった。
出鱈目なフォーム。

何の感慨も感想も感情も沸いてこないフォーム。
その右足が上げられ、その豹の足が持ち上げられ、僕の腹をバネを効かせて蹴り押しした。

激痛。

景色が矢のように飛んだが飛んでいたのは僕だった。

後ろの立方体か直方体の角に脊椎を強打。折れる音がして、音も無く治った。

「ゲツホ……」

地ヘッドが喉に掛かっていたので咳をして吐き出す。

五十メートル左に上條朱音と鈴木さんがいた。

そして上條朱音がこちらに向けて足を進めた瞬間、消えて、「やあ少年」と後ろから声がする。

「……はあ？」

瞬間移動。

そつだ僕もいきなり、百メートル前方の化け物の前に繰り出していた。

「これが鈴木さんの能力だよ」

「瞬間移動？」

くすりと笑い、僕の横に並んで手を差しのべる上條朱音。「どうだろうね。彼の能力は『カットコーナー』だとか呼ばれてるよ」

「カットコーナー……、近道、ですか」

「そつそつ。まあ簡単に言えば、空間を脱落させるんだ。さっきは君と化け物の間の、約百メートルという空間を脱落させた」

「だから僕の位置と化け物の位置が繋がったと。はっ。ノンロジックにもほどがある」

「不死身の君が言うかい」

言つて、上條朱音は走り、脱落した空間を通れずに飛び越え、化け物の目の前に現れる。

触れると、死んだ。

化け物は、死んだ。

*

戻つてくると、カウンセリングだった。上條朱音を交えて、三人で

「ところで、朱音さんの能力つて、何なんですか？」

「命の支配、と言ったところかな。身体能力を底上げすることもできるし、逆に機能させなくすることもできる。触れた相手のね。もちろん自分にもできるよ。で、宏さん、ああ、あの強烈なおじいちゃんのことね。あの人の能力は、命の支配じゃなくて、命の破壊」

「壊すだけ、つてことですか」

身体能力の向上の部分は無く、身体活動を止める部分だけ、彼女から抜き出したような力。

「で、まあ少年。そろそろ帰らたまえ。明日は遂に銃を渡す。君も化け物を殺してみよう」

*

次の日。つまりは金曜日。

昨日と同じメンバーで、空間を渡る。

田んぼだった。

田園風景が延々と続いている。

ただひたすらに田と畦道が交互に、地平線まで続いている。

そして、そののどかな雰囲気に不釣り合いな化け物の形。

全身が黄金色で、シルエットは狼。もちろんそれはシルエットの話であって、詳細はちゃんといつも通りに出鱈目である。

まず顔面から既に破綻していた。

本来は鼻があるだろうその位置からは、小さな人間の腕がだらしなく生えていて、手のひらには人間の口が場所を貰っていた。

無論、鼻（鼻で良いのだろうか）の下には狼を象徴するが如く、凶悪な口が存在していた。

そして鼻の上、つまり額と眉間。それらは無かった。

つまりは顔面にびっしりと眼が埋められているのである。

蠅のような無機質な複眼ではなく、眼球が縦横無尽に散りばめられ、そして積み重なっている。目玉を掻い潜って、可愛らしい獣耳が、礼儀正しく所定の位置に生えていた。

そして四肢は全て、霊長類のそれである。

これまたご丁寧なことに、右後ろ足が生える部分には右手が生えていて、じゃあ右前足が生えている部分には右足が生えるのだろうかと思っただけれど、そこは普通に右手が生えていた。いや、普通ではないのだけれど、とにかく腕が三本と足が一本生えているのだ。全くもって出鱈目である。

「じゃあ少年、私が四肢を破壊するから、動けなくなるところをトドメ刺してね」

「自分でやった方が早くないですか？」

「君に慣れてもらうんだよ」

殺すことにね。

言って上條朱音は僕に小さい拳銃を手渡す。

見た目の割りに、サイズの割りに、それはとても、重かった。手の

中の銃から目を反らして前を見ると、上條朱音はカットコーナーの力で、既に化け物の懐に入ろうとしていた。

化け物が上体を起こして、上條朱音を踏み潰そうと足を振り下ろした瞬間、彼女は右手で手刀を放ち、前足を二つ、付け根から切断した。触れた部分を腐敗させ、脆くなったところを人外のパワーで撃った手刀で切断。

前足を二つ失った狼は、顔面から地面に倒れ伏す。無様に尻を上げているところを見ると、何故かなんだか親近感が湧いたが、そんなことはどうでもいい。

上條朱音は流れるような体捌きで後ろの両足をも斬り落とした。

「さあ少年、出番だ」

少し離れている僕と鈴木さんに聞こえるように声を上げ、呼んだ。

僕も彼女と同じく、鈴木さんの力で化け物の前に繰り出す。

まだ生きている化け物。

獣のような唸り声を上げ、百眼の全てで僕を睨みつけている。

無機質な接触音を立てながら、僕は銃を両手で構える。

右手で銃を持ち、引き金に指をかけ、左手でそれを支える。

きつと脳天があるだろうその場所へ、向ける。

「殺すんだ少年」

僕は。

「撃つんだ少年」

僕は。

「引き金を、引くんだよ、少年」

僕は。

「……貸してごらん」

僕は言われるがままに、正面にいる上條朱音に、震える手で渡す。すると彼女は、受け取った銃を手の内できると回しながら腕を上げ、流れるような動きで僕の脳天をぶち抜いた。

「……な、に……を……」

「甘いんだよ」尚も銃を下げずに、僕の額に照準を合わせながら続

ける。「甘ったるい。甘過ぎる。なに一丁前に躊躇してるんだい、不死身さん」

動揺する僕を畳み掛けるように、若干に強い口調で続ける。

「豚に真珠も良いところだよ。似合わないんだよ、くそがき。不死身でニヒルな君にはもう既に人間の価値観は相応しくないってことに、どうして気付かない」

「……大型の動物を、殺すのを躊躇するのは、当たり前でしょう」

「はっ。普通だねえ。普通過ぎるよ少年。君はそんなに普通が好きかい？」

「普通より素敵なポジションなんて、存在しませんよ朱音さん」
震えながら答えた僕を、彼女は揶揄するようにわらった。「そうかい」

上條朱音は僕から眼を反らさずに腕を下ろして、トリガーを引いて化け物を殺した。

「慣れるよ。楽しみにしておくといい」

六話 好機、動機、転機。

蚊を叩いた。

蟻を潰した。

「なんで、化け物は無理なんですかね」

僕は先日のように取り乱すことはなかった。むしろ頭は至って冷えていて、思考することも、会話することも、充分に冷静に、冷徹に、成立していた。

「その質問の答えなんて、君はもう既に持っているだろう？少年」

「そんな、僕を偽善者みたいに言わないでくださいよ」

「違うのかい？」

僕は無言と溜め息で返事をして、白いソファーに背中を預ける。

土曜日と同じ展開で化け物を殺せなかった僕は現在、日曜日を生きている。

生きていくという表現で良いのか不安だけれど、取り敢えず今現在は日曜日。白い部屋。

「じゃあ少年。私が君のモヤモヤを言葉にして整理してあげるよ。

つまり君は大きな生物が殺せないんだよ」

間違っている。

僕はそんな偽善者じゃない。

僕はそんなレベルの偽善者じゃない。

面倒臭いので、上條朱音の言葉を口に出しては否定しないけれど、ともかく僕はその程度の偽善者ではない。舐められては困る。

僕は小さな生物だって殺せない。それこそ蚊や蟻だって、僕は殺せない。

飛んでいた蚊がウザかったので、叩いて潰す。

そもそも僕は、そんなモノに命の価値なんざ見い出していないのだから。

それは僕にとって、殺害行為ですらない。

けれど、あのサイズならどうだろうか。あの化け物たちのサイズなら。心臓が動いているのを、外皮が動いていることで確認できるサイズの、モノならば。

つまり彼ら、彼女らには、命の価値が見い出せる。

僕よりも尊いものはわからないけれど、取り敢えず蚊や蟻よりは重い。

ならば躊躇する。全力で躊躇する。

物思いに耽っていると、栗色の長い髪を揺らしながら、綺麗なお姉さんがお茶を持ってきてくれた。

僕と上條朱音と上田さんの三つ分。

上條朱音がニヤニヤと汚い笑みを浮かべながら、その綺麗なお姉さんを見遣ると、顔を真っ赤にして逃げて行った。

僕がまた物思いに沈もうとしていると、上條朱音が口を開いた。

「ねえ少年。君は偽善者なんだから」シニカルに笑いながら続ける。

「偽善者は偽善者らしく偽善を發揮すれば良いと思うけどね」

「何が言いたいんです？」

彼女はお茶を一口飲んで答える。

「君は何のために不死身になったんだい？」

……。

ああ、そうだったそうだった。

何を忘れてるんだ、僕は。

「行きましよう朱音さん。今なら殺せます」

僕の幼なじみを、守るためだったっけ。

「そこなくっちゃね」

上條朱音は、わらっていた。

*

結論から言うと、僕は化け物を殺せた。

命を奪うという、宗教染みたとさえ言える大事も大事、一大事がこんなに呆気なく、そして圧倒的に簡単に終わるとは思わなかった。つまり上條朱音が例によって四肢を切断し、そして僕は例によって銃を構えて、そして初めて発砲した。

首を折られた犬が、最後に発する声のように虚しく響いた断末魔を掻き消すが如く、バン、バン、と二発を続けて撃ち込んだ。

実に呆気ない。

こんなものか。

鉄の塊から飛び出ている引き金を人差し指でクイと引いて鉛玉を発車させると生き物は死ぬのか。

確か解糖系やらなんたら回路やら、とにかくにも理解するのに少しばかり苦勞を要する化学反応などで動いている生命活動も、微塵の爆薬には齒すら立たない。
全く。

「…………ふう」

「順応が早いね少年。素晴らしい。異世界トリップ系なら、誰よりも主人公だったのに。残念だったね」

「まだ、震えはありますけどね。まあ躊躇する理由を圧倒する目的を、思い出しましたから」

霧島唯のため。

彼女の為に、命を奪った。

少ないながらも、軽いながらも、価値のある命を、僕は奪った。

紛れもない偽善で。

「まあ、これなら大丈夫ですね、朱音さん」

「ん？」

僕は一度、右のこめかみに銃口を当てて引き金を引いた。振った炭酸を空けたように、反対側から何かが弾けた。

「すぐに慣れそうです」

*

いやあ、なかなか頭がバグってきた。

モヤモヤしてたものを吹き飛ばすために、文字通り頭を吹き飛ばすなんて、そうそうできるものじゃない。僕が適度に尊敬するカートコバーンでもできないはずだ。

そんなことを考えながら、僕は帰路を歩いていた。

この道沿いに、霧島唯の友人の家があるらしいけれど、あんまり興味はない。

ここで彼女に会ったらどうしよう。

仕事を終えて、家に帰るときに会ったらどうしよう。

いや、関係ないのか。

どうせ傷なんて残らないし。

偶然に出会ったのなら、「こんちわ」とでも言えば良い。幼なじみなんて、そんなものだ。

夏休みか。何か忘れてる気がする。

八月の三週目に突入して、何かやっていないことがある気がする。

ああ、海に行っていないのか。

沖縄の中南部にある海は意外と汚いらしいけれど、これもまたどうでもいい。観光ではなく海に行きたいのなら離島が良いらしいけれど、またまたどうでもいい。

そんな地元の人が言ってるような主張なんざ、僕には関係ない。

霧島唯とその周りにしか、僕の世界は存在しないのだから。

考えてみる。

彼女がもし、僕と同じ高校に行かなかつたら、僕はどうなっていたのだろうか。

何も変わらないんだろう。

僕の知らないところで霧島唯が暴漢に乱暴されたって、それを知らない僕には何もアクションは起こせない。

無論、耳に届いたのならブラジルからでも飛んできて、僕が二百年くらいは牢屋から出れなくなる程度の復讐はするはずだけれども、終身刑というやつだ。

悲しいかな、僕には親族がないから、被害者家族は息子がこの世を去った悲しみを掻き消すためのお金、つまりは慰謝料すらも貰えない。と思う。

僕の貯金箱に三百円くらいは入っていたから、それは取られるんだろうけど。

ああ、あと父親の財産もか。

それくらいで息子一人分くらいの死はチャラにしてくれるはずだ。

世の中は金だ。

金だけだとは言わないけれど、金ではある。

僕だって金が無いと生きていけない。あ、僕の場合は大丈夫なのか。訂正しよう。

世の中は金なんかじゃあない。

僕の場合は、と続く。

なんと素晴らしいロマンチズムか。僕は豪語できろぞ。

金がなくともなんとかなる。

金なんていらぬ。
金なんて俗物だ。

……やばい。本格的に頭が沸いてきた。

金なんていらぬ、なんて言い始めたら、だいたい狂人の域に入ってきた合図である。

まあ、合図がそれだけ、というわけではないけれど。
例えば。

両親の声が思い出せなくなったとか。

死んで、経った十年前後で、顔のパーツと、それらの配置があやふやになってきたとか。

……つーか、何で死んでんだよ。

口には出さない。

お陰様で、あんたらの息子は頭がおかしいことになってきてるよ。
愛情たっぷり育てられたことは知っている。うる覚えで知っている。

詰まらない喜劇だ。

悲劇どころか、喜劇の主役にすらなれていないんだよ、田中圭太。

中途半端に生きやがって。

中途半端に老いやがって。

中途半端に病みやがって。

中途半端に死にやがって。

中途半端に腐りやがって。

中途半端に笑いやがって。

これがお前の人生なんだよ、欠陥野郎。

一生ずっと、霧島唯を信仰してろ。

あの完全無欠を、死ぬまで守れば良い。

何かを、殺し続けて。

何かを、壊し続けて。

壊れかけの僕を。

木端微塵に破壊して。

七話。狂気に染まる。

「ぐ、ぬっ……」

バゴン、と派手な音を撒き散らして、右半身が吹き飛ぶ。

「大丈夫すか」

後ろの宏さんに声をかける。

「ああ、もっと進め。ゆっくりで良い」

僕を盾にして、広島宏は悠々と歩く。

熊に羽を生やして、頭だけが馬になっただけの、今までに比べると至極単純な形をしている化け物。

鼻から飛んでくる何かが、弾薬らしい。

音速はあるつか、その速度で飛んでくる、当たれば炸裂する鉛玉を、僕は体を張って受け止める。

ああ、来いよ。

「弱いんだよ、雑魚が」

ボン、と腹が丸ごと無くなる。

だからどうした。

「残念無念。オレはそんなもんじゃ死なないぜ」

頭が吹き飛ぶ。

「はっ。くだらねえ、くだらねえんだよ」

じりじりと後退りを始める化け物。

ああ、そうだ。

「もっと怯えろ」

距離五メートル。

飛びかかる。

僕が化け物に飛びかかる。

ガシリと抱きつき、固定する。

「宏さん」

「ああ」

またもや悠々と歩き、僕の顔の横で、化け物に触れる。

「終わりだ」

終わった。

僕は敵の攻撃を、体を張って受け止める。
まるでヒーローのように。

「慣れてきたな豆太郎」

*

初めて化け物を殺してから二週間、僕は毎日のように、そして実際毎日、化け物を殺していた。
ある時は銃で脳髓を吹き飛ばし。

ある時は刃物で内臓を抉り出し。
そして八月の五週目に突入した日曜日。
残念ながら、女子からのお誘いもなく、何も起こらずに夏休みが終
わりそうである。

何も、起こらずに。

宏さんとの仕事を終え、白い部屋に戻り、血塗れ半裸の僕はシャワ
ーを浴びて、新しいジャージを着る。
シャンプーが欲しいな。髪がギンギシしてしょうがない。

そんなことを思いながら、僕はエントランスに繰り出した。

「やあ少年。紹介するよ。間垣清治さんだ」

「……清治、さん」

僕の知る限りにおいては、「清治」という響きは極めて男らしい、
素晴らしい名前だと思うのだけれど、目の前の清治さんは、筋骨隆
々、胸毛フサフサ、そしてどこからどう見ても、オカマだった。

「……ヨロシクオネガイシマス」

仮面が崩れそうになるほどに、衝撃的な人種を目の当たりにしてし
まった。

「よろしく」

語尾にハートがつく甘ったるい男の声で、返事をしてくれた。

「ポストマンという能力だよ」と上條朱音が隣で言う。

ポストマン。運び屋。

「間垣さん、三人でプリンでも食べようか」

すると、最寄りの席にプリンが三つ現れた。

「……………わお」

三人でソファ―に座り、プリンを食べる。

「あら、ごめんなさい、ちよつと呼ばれて……………」と、座った途端に間垣さんは席を立った。この能力だ、引つ張りだこは間違いない。

「久々に二人きりだね、少年」

「そうですね」

「言いたいことがあるなら好き勝手言っていればいいからね。君はこの組織に入った時点で、惑星を一個買えるくらいのお金じゃあ買収取れない程度の損はしてるんだから」

「すごいなおい。」

「そんな自覚はありませんけどね」

「今に分かるさ」

ぱく、とプリンを口に運ぶ上條朱音。

「気になったんですけど、僕くらいの年齢の人っていますか？」

「いや、君は最年少だね」

「なるほど」

ならばこの組織内でラブコメは起きないわけか。つくづく詰まらない人生だ。

「もう慣れたかい？少年」

「慣れました」

即答。

実際に僕は、何度か銃で止めを刺した。

もう、震えなかった。

偽善を掲げて、殺した。殺せた。

「学校はいつからかな？」

「ああ、えーっと、金曜からですね」

「じゃあ木曜は休みにするよ。その代わりに水曜はちよつと、大き

めの仕事をこなそう。ああ後、金曜は来てね。放課後にでも」

*

水曜日。

月曜も火曜も、カウンセリングばかりだった。

今度こそ、もう必要ないと思ったので、やめる旨を火曜日に上田さんに伝えた。

大きな仕事がある。そう言われた水曜日。

異空間に渡る部屋。

面子は、僕と上條朱音、鈴木さん、そして『バイオキャノン』の黒岩さん。

僕は部屋の中心に佇む。

空間が裂ける。

覚悟を決める。

例によって、決死の覚悟ではないけれど。

なんの気なしに、世界を跨ぐ。

穴をくぐって、化け物に会いに行く。

さあ、仕事の時間だ。

*

摩天楼と言うのだろうか。

高い高い建物がびっしりと並び、遙か彼方の下界は闇の中に沈んで

いる。

同じ高さの平面が、断続的に、永遠的に続く空間。

「落ちたらどうなるんだろうねえ」

そんなことを暢気な口調で吐き出す上條朱音。

ひゅ、と空気が裂ける音。

僕は動く。

体が動く。

最小の動きで最短距離を飛び、鈴木さんの右上から飛んできた何かを、横腹で受け止める。

体があり得ない角度に仕上がって、地面に叩きつけられる。

「……ふう。今はフラインプレーでしょう」

左の脇腹を見ると、黒地のジャージが破れ、下から着ていた白いシヤツが鮮血に染まっていた。

それほどの攻撃。

脇腹を突き破って出血させる程度。

「たいしたことない」

貫通しないのなら、僕の見せ場だ。

さあ、壊してみろ。

僕をこれ以上、壊してみろ。

「少年」上條朱音は僕の首に手を当てる。
体が軽くなる。

僕は今、人外の回復力と、人外の運動能力を保有している。

鈴木さんを囲むように陣を組む。

左にバイオキャノン、右に上條朱音。

ひゅ、とまた鳴る。

上條朱音の正面から。

庇おうと思ったが、

「いらない！」

と言われたので飛びかけた足を落ち着ける。

彼女は手刀で飛来物を叩き落とした。

「……針、みたいだね」

地面に刺さったそれを見て言う。

ていうか左隣のシド・ヴィシヤスみたいな髪型のオッサンが無口だ。

一緒に仕事をするのは二度目だけれど、話したことはない。

「上條」

とだけ言って、バイオキャノンは、自らの右腕、肘から先を弾丸にして発射した。

爆発音。

それに呼応するように、気味の悪い悲鳴が響いた。

前方には、化け物がいた。

人間の皮を剥いで、その代わりに剣山を張り付けたような形。

それだけだった。

確かに針の塊は、人間の形を象っている。

びっしりと、所狭しと生えている針。

長さは全て均一で、三十センチか、それ以上。

あれを飛ばしているのか。

すぐに分かる。確かにあんな針程度じゃあ、一撃必殺の殺傷能力は

無い。
けれど。

けれど、やっぱり僕以外が喰らうわけにはいかないだろう。
激痛は人を動けなくする。

動けなくなつた人は、ただの的になる。
それは、避けるべきだろう。

「……」

僕は意を決する。

「黒岩さん」

顔を僕の方向に僅かに揺らし、僕に返事をするバイオキャノン。

「あいつを怯ませてください。そのあとは、鈴木さん、僕を化け物のところまで」

分かった、と何も言わずに、何も聞かずに答える鈴木さん。

「朱音さん。念のためにもう一度、僕の身体能力を底上げしてください」

上條朱音は返事をする代わりに、ふ、と人差し指の背で首筋に触れる。

僕の血が沸く。肉が踊る。力が、みなぎる。

化け物が、針の向こうで赤色に光る不気味な目で、こちらを捉え直す。

一瞬のバックスイング。
隙を逃がさない。

バイオキャノンは、上條朱音の力によって再生した右腕を、さつきと同じ規模で炸裂させて、弾丸を飛ばす。

爆発。

僕は間髪を入れずに走り出す。

鈴木さんと息を合わせた瞬間、景色が変わって目の前に剣山の塊が現れる。

体から爆煙を散らし、ノックバックしている凶器の塊。

僕は。

左手を伸ばす。

体勢が整っていない化け物を、押し倒す。

針が刺さる。

手の皮を突き破る針。

そのまま手首の奥まで侵入する針。

背中から倒れた化け物の、マウントを取る。

激痛。

足にも、尻にも、急所にも、化け物と触れている部分全てに、針が刺さる。

気が触れる。

右拳を撃ち込む。

針の山を、自ら叩く。

お前じゃ僕に、勝てないんだよ。

「無力なんだよ、化け物」

化け物が敗北を自覚する顔は、最高に無様で、最高に最高な気分になる。

愉悦。

悦楽。

楽しい。

圧倒的な力で、蹂躪する。

「くふ」

と思わず声が漏れる。

まだか。

まだだよな。

「まだ、死んでねえよなああああああああ！」

鳴っているのは、肉がひしゃげる音か。血が吹き出る音か。皮が破れる音か。骨が折れる音か。針が折れる音か。拳が碎ける音か。それとも。

僕のわらい声だけなのか。

飛ぶ血飛沫。
わらう僕。

ああ。

僕は。

もう壊れた。

あるいは既に、壊れていた。

わらう。

酷くわらう。

針の向こうにあった、二つの赤い光が消える。

「……死んだ」

マウントを解いて、立つ。

血にまみれた股、腕。

僅かに血を浴びた顔面。

「お疲れ」

上條朱音と同じ表情でわらっていたことに、僕は気付いた。

「……完成、ってわけですか」

狂気の沙汰の、不死身の戦士。

いつもだ。

僕はいつも終わって気付く。

全てが済んで、初めて気付く。

夏休み終了の前日。

「……これからもよろしく、少年」

僕の全ては、狂気に染まった。

終章。悲劇の始まり。

夏休み最終日。木曜日。

いつものように僕は朝早くに目覚め、卵を適当にスクランブルエッグにして、塩を撒き、インスタントのスープを作り、朝食を済ませる。

昨晚言われたように、通帳を開いてみると、振り込み欄に驚愕の数値が記録されていた。

一般的なサラリーマンの月収が二十万前後か、いや、父親すらいない僕はそんなこと分らないけれども、じゃあ取り敢えず、多く見積もって三十万だということにしよう。

時給でも日給でもなく、一仕事当たりで支払うと言っていたから、大体二十回の仕事をこなしている僕は、計算してみることにした。

一仕事、約百万強。

「う、うわぁ……」

僕は八月いっぱいまで二千万と少しを稼いでいた。確実に駄目人間になる。

元々、僕は両親の遺産を継いでいるわけだから、僕の資産は相当なものになっていた。

けれど。

「……まあ、当然、か」

思わず下らないことを呟いてしまったくらいに、それは真っ当な見返りだろう。

狂気を育む仕事なんだから。

命を奪う、仕事なんだから。

それどころか、人間を失格しないといけないんだから。

リタイアコースを走らせるわけだから、この金額の給料は、当然だと言える。

果たして今日は何しようか。

僕が仲良く付き合っている男子バスケットボール部のキャプテンは、きつと部の連中と遊んでいるし。

いや、僕も別に部員と仲が悪いわけではないけれど、進級と同時に辞めたから、後輩との面識が無いのである。

だからバスケットボール部で遊んでいるのなら、僕は参加するべきではないだろう。

楽器屋にでも行こうか。

今ならギブソンだって買える。

部屋を防音仕様に改造して、ドラムを叩ける環境を作るのもなかなか乙だけれど、管理人さんに怒られそうだからやめておこう。

まったく。

つまらない休暇を過ごしてしまった。

来年はきつと受験で忙しいというのに。

何もしてないじゃないか。

ただ、生物を辞めただけじゃないか。

拳銃で頭を吹き飛ばしたくなる衝動を堪え、思考を止める。

馬鹿か！？

馬鹿ですか！？

何で漫画とか読んでるんですか！？

駄目なんだよ。

彼女に、霧島唯に、少しでも異常に気付かれたら。

彼女は責める。

自分を責める。

「お前を守るために」なんぞ言ってしまったらお仕舞いなんだ。

平生に。

通常に。

自然に。

普通に。

彼女に騙れ。

自分を騙れ。

自分に騙れ。

騙して、騙して、騙して。

僕の尊敬する完全無欠を、守り続ける。

「それだけなんだよ」

終わって始まる。

夏休みが終わって、新学期が始まる。

悲劇が終わって、悲劇が始まる。

本当の意味で、悲劇が始まるのはこれからだったということに、やっぱり僕は、全てが終わって気付いたのだけれど、そんなことは予知能力者くらいにしか分からない。しかし僕は過ぎたことにくよくよしまくる人間であるから、後悔する。

気付くべきだった時は、夏休み最終日ではなく、かと言って徹底的にベルセルクに成った昨日でもなく、僕が不死身になったその日である。

その日に、全ての解答へと辿り着くヒントは落ちていたのだから。

もしかすると、あのバッドエンドは、開幕と同時に始まっていたのかも知れないと、つまり始まった時点で終わっていたのかと、僕はやっぱり、また今さらになって気付いたんだ。

不死身になって死ねなくなって、幸か不幸かどちらかと言うならば、その二択で選べというならば、やはり不幸なんだろう。

ただ、狂気の淵から、狂気の底へと突き落とされただけの物語。

不死身になって、敵を殺して、狂気に染まった。

これもまた、バッドエンドなのかもしれない。

無論、これから始まる約一ヶ月に渡る大悲劇には、全然まったく及ばないのだけれども。

とにもかくにも、僕はこうして、異常に足を踏み入れたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4787k/>

ロストロジック

2010年10月14日15時14分発行